

グリムメルヒェンのモチーフを探る(4)

—刑罰と残忍性(中)—

満足 忍

Studies on the motives in “Grimm’s Märchen”(4)

—punishment and brutality (part 2)—

Shinobu Manzoku

はじめに

本誌第30号(前号)では、グリム童話における刑罰と残忍性の内、[1-a 斬首, 首をはねる], [1-b 絞首刑, つるし首], [2 火あぶり, 焼き殺す, 釜茹で], [3 樽につめる], [4 川(海), 井戸に投げ込む], [5 身体を引き裂く]の各モチーフを分類し、その描写を抽出し、報告した。それに引き続き本稿では、

[6 身体の一部を切り取る]

[6-a 手, 指, 足, かかとを切り取る]

[6-b 目をくり抜く, 舌, 内臓を切り取る]

[7 身体を切り刻む]

[8 人喰い, 身体の一部を食べる]

[9 真っ赤に焼けた靴・鎖・炭を用いる]

[10 蛇の中に入れる]

[11 いばらに刺される, 針で刺す]

[12 熱い蠟をたらす]

[13 石臼を落とす]

の各モチーフを紹介・報告し、次号(第32号)で、[14 毒殺] [15 こん棒で一撃, 薪割り・斧で一撃, 殴り殺す] [16 塔(牢)等に隔離] [17 子捨て] [18 特に方法の記述がない死刑] [19 自殺] [20 その他の残忍な描写]の

モチーフについて報告して本テーマをまとめる予定である。

グリム童話には刑罰や残忍な行為が頻繁に取り入れられている。これらのモチーフは、童話特有の勸善懲悪やハッピーエンドのための手段としてだけでなく、話の展開進行の上で、主人公の魔法からの解放や救済のための重要な手段のひとつとして用いられている。そのためこれらの残忍な行為はほとんどの場合その場限りのものであって、いったんその役割を終えるとその行為は忘れ去られ、それ以上言及されることはない。また、一部にウィルヘルムによる行き過ぎと思われる加筆も見られるものの、これらの行為は具体的な描写の表現や苦痛や恐怖心の表現を伴っていない。これはグリム童話の持つ平面性や1次元性の特徴の表れと言える。なお、グリム童話のモチーフの特徴についての詳細は前号の「はじめに」に記してある。

本稿においても前回の報告と同様に、グリム童話に国際的に使用されているKHM 1~210の番号に準拠し、日本語訳は『グリム童話全集 I~III』(高橋健二訳)から引用し、引用箇所にはなるべく手を加えずに「」内に示した。

[6 身体の一部を切り取る]

人間の身体に関するモチーフは民俗学的なテーマとも深い関わりを持っており、グリム童話の中でも頻繁に取り入れられ、話の展開に大きな役割を演じている。

グリム童話には人間の身体の一部を切り取る、または臓器を切り取る行為は12話に見られ、この内未遂を含め1種類の臓器を切り取る場合が16例、2つの臓器を同時に切り取る場合が4例(全て未遂で代替として動物の臓器が提供される)ある。最も多い臓器が目で8例、次いで舌4例(内1例は死体の舌)、手3例(内1例は死体の手)、心臓と手の指、かかとが各2例(内1例は死体の手の指)、肺、肝、足の指が各1例である。人間が身体の一部を切り取られたことが原因で死に至る例はないが、目の再生が2例、腕の再生が1例ある。

主人公の殺害(4例全て未遂)の証拠として好んで求められるのは、目、舌、心臓、肺、肝であり、その代替として提供されるのは鹿や猪の臓器である。

課題遂行のために、自らの意志や賛同の下で自分の身体の一部を切り取るのが7例(内主人公が5例)ある一方で、滑稽話で動物の目をくり抜く1例と悪人退治の証拠品として死体から舌を切り取り持ち帰る1例を除くと、主人公自らが復讐や罰を目的として相手の臓器を切り取る例は見当たらない。これは、メルヒェンの主人公に精神的深さが欠如しており、復讐心が薄く、喜怒哀楽の感情を備えていないことによるものと考えられる。また、通常メルヒェンにおける身体の一部を切り取る行為はKHM 25(7羽の鳥)やKHM 31(手なし娘)に見られるごとく、いたって平然と機械的に行われ、苦痛の表現や血の出る様の描写は極めて希である。これはメルヒェンの特色とする平面性に由来している。

[6-a 手、指、足、かかとを切り取る]

手は力や所有権、権力を表現するものとされている。また、足やその部分、靴などは人間全体を代表する象徴的な意味の魔力的な意味を備えている一方で、足跡や靴は幸運と多産の力が来るといわれている。

★KHM 21(灰かぶり)：2人の娘が足の指、かかとを切る→妃の座を得るための手段として。

王子が差し出す金の靴に、足の親指が邪魔になって入らないと、母親は娘にナイフを渡し指を切り落とすことを命じる。『お后になればおまえはもう足で歩く必要なんかないんだよ』娘は足の指を切り取り、無理に足を上靴に押し込みました。歯を食いしばって、痛さをこらえ、王子の前に出ました]

母親は次の娘にもかかとを切り落とさせ、むりやり靴を履かせる。

「王子は娘の足を見ると、血がわき出していました。……王子は……これはほんとうの花嫁ではない……と言いました」

*「歯を食いしばって、痛さをこらえて」の表現は、一見精神的な苦痛を表しており、メルヒェンではないようであるが、ここでは靴が足に合わない、つまり、偽りの花嫁であることを表すことに主眼が置かれている。「血がわき出していました」の表現はやや誇張している感もするが、偽りの花嫁であることを判明させるためには不可欠な描写であろう。

★KHM 25(7羽の鳥)：ヒロインが指を切り落とす→兄たちの救済ためにヒロイン自らの意志で行う。

鳥に姿を変えた兄たちがいるガラスの山の鍵をなくした「優しい妹はナイフをとって自分の小さい指を切り取り、門に差し込むと、うまい具合に門が開きました」

*この場合の指は骨と同意で、小さな骨が護

符として用いられた慣習に関連しており、課題達成のために城に入る鍵の役目を果たす。失われた指について、その後再生したか否かの記述はない。メルヒェン形式の特色である一次元性に由来する。

★KHM 31(手なし娘)：ヒロインが両手を切り落とす→父親の救済のためヒロインは切断を快く承諾する→両手は神の恵みで後に再生する。

粉ひきは悪魔と娘を渡す約束を交わす。悪魔は娘の両手が清められているので「『娘の両手を切り取れ。でないと、おれはあいつに手が出せない』『……(娘を渡さない)おれはおまえを連れて行く』」粉ひきは怯えて娘の両手を切り取る約束をする。「娘は『お父さんのしたいようにしてください。私はお父さんの子供です』と言って、両手を差し出し、切り取らせました」

妃は天使の「家に7年間いて、親切に世話をしてもらいました。信心深いため、神様の恵みで、切り取られた腕が元のようにのびてきました」

*手は人間の身ぶりの卓越した担い手である。民俗学では結ばれた2つの手は愛、忠誠、友情、結婚のシンボルとされる。また、手は口と並んで所有権や権力を表すと言われている。つまり、手や腕を失うことは、現在・未来の自分の所有権や権力を失うこと、自我の喪失を意味する。このため、手を失ったヒロインは父親の「おまえを一生大事にするよ」の言葉に「ここにはいられません。よそにいきます」と親子の権利を放棄している。

★KHM 40(盗賊のおむこさん)：盗賊が死体の指を切り取る→死体から指輪を奪う。

「盗賊の1人は殺された娘の小さな指に金の指輪がはまっているのに気付きました。すぐに抜けなかったので、斧をとって指を切り落としました。すると指は高くはねて、樽の向こうに

飛び、隠れていた娘の膝の上に落ちました」

*死体から指輪を抜く行為は、盗賊の強欲、盗賊への恐怖心を募らせるための表現であると共に、死者の現世との関わり・結びつきを解き放つ行為とも考えられる。

★KHM 97(命の水)：ヒーローのかかとがちぎれる。

王様の命を救うことができる命の水を得た王子が城から脱出する際に「門はおそろしい勢いで閉まり、王子のかかとを少しちぎり取りました」

*危険を伴う間一髪での脱出を際立たせるための表現以外、話の展開や進展には特別な意味を持っていない。

★KHM 118(3人の軍医)：ヒーローが自らの意志で自分の手を切り取る→元に戻せる技術の証として。兵隊が預かった手の紛失を隠すために死体の手を切り取る→盗まれた軍医の手の代替として。

第1の軍医は自分の手を切り取って、「言葉どりに手……を切り取って、お皿に……乗せて、主人に渡しました」預かっていた手が女中の不注意から猫に盗まれると、女中の恋人である兵隊は「『外の首くくり台に泥棒がぶらさがっている。そいつの手を切り取ろう。……女中は……兵隊によく切れる包丁を渡しました。……可哀想な罪人の右手を切り取って持ってきました』翌日それを軍医に渡しました」

*軍医の手が知らない間に泥棒の手にすり替わり泥棒の行動をとるようになるという滑稽話であると共いうぬぼれに対する戒め。

[6-b 目をくり抜く、舌、内臓を切り取る]

目は人間や動物の本質・力を作用させることから、目を失うことは人間の活動能力を失うことに通じている。また、臓器、とりわけ心臓には生命と魂の座があるとみなされている。

殺害の証拠品として使われる臓器の内最も多

いのが舌で、目や心臓が次に多い。

★KHM 21(灰かぶり)：鳩が悪い姉妹の目をつつき出す。

偽って花嫁にすり替わった姉妹が教会に入るときに「鳩が姉と妹の片目をつつき取ってしまいました。その後、教会を出るとき……鳩はめいめいのもうひとつの目をつつき取りました。……姉妹は意地悪をし、嘘をついた罰として一生目が見えなくなりました」

*鳩はしばしば精霊として描かれ、鳥と対照されるが、KHM 107(2人の旅職人)に見られるように、時として鳥が鳩に取って代わることもある。

★KHM 31(手なし娘)：悪魔の陰謀でヒロインの舌と目を切り取らせる→主人公殺害の証拠として→未遂。ヒロインの母親が代替として鹿の舌と目を切り取る。

妃に子供が産まれたことを伝える王様の手紙が、悪魔の「妃を赤ん坊と一緒に殺せ」「妃を殺した証拠に、妃の舌と目玉を取っておくように」と書いた手紙にすり替えられる。妃の母親は妃を殺す代りに「夜中に鹿の雌を連れてこさせ、その舌と目玉を切り取らせ、しまっておきました」

★KHM 32(りこうなハンス)：ヒーローが動物の目をくり抜く。

「女性には優しい目を投げてやるもんだ」という母親の言葉に「ハンスは馬屋にいき、子牛や羊の目を残らずくり抜いて、グレーテルの顔に投げつけてやります」

*ヒーローが行為者であるが、言葉遊びの滑稽話であり、残酷性は感じ取れない。

★KHM 33(3つの言葉)：父親がヒーローの目と舌を切り取らせる→未遂→殺害の証拠の代替として家来が鹿の目と舌を切り取る。

馬鹿な息子に怒った伯爵は「こいつはもうわしの息子ではない。……こいつを森の中に連れて行って命を奪え」と家来に命じる。殺すに忍

びない家来たちは「伯爵に証拠が見せられるように、小鹿の目と舌を切り取りました」

★KHM 53(白雪姫)：母親が嫉妬からヒロインの肺と肝を切り取らせる→未遂→殺害の証拠の代替として狩人が猪の肺と肝を切り取る。

「妃は……狩人を呼び寄せて言いました。『あの子を森の中に連れていきなさい。私はあんな子をもう目の前に見たくない。あれを殺して、肺と肝を証拠に持ってきなさい』狩人は……姫のきよらかな心臓を突き刺そうとしました」殺すに忍びない狩人は「猪が走ってきたので、狩人はそれを刺し殺し、その肺と肝を切り取り、……妃のところへ持っていきました」

★KHM 58(犬と雀)：動物が動物の目をつつき出す→主人公である雀が3頭の馬に対する復讐として→御者が誤って馬を殺害する。

仲間の犬を馬車に轢かれて亡くした雀は仕返しに「馬の頭に飛んでいき、目をつつき出しました。御者はそれを見ると、斧を引っ張り出して、雀を打ちのめそうとしましたが、雀が高く上がったので、御者は馬の頭を打ったため、馬は倒れて死にました」

★KHM 76(なでしこ)：悪い料理人がヒーローの心臓と舌を切り取らせる→未遂→殺害の証拠の代替として娘が鹿の心臓と舌を切り取る。

料理人は、願い事を叶えることができる王子がいつか自分を困らせると心配し「女の子をわきに連れていき、『今夜、男の子が眠ったら、ナイフを胸に刺し、心臓と舌を切り取って持っておいで。そうしないと、おまえの命はないぞ』と言いました」女の子は王子を殺す代わりに「小さい雄鹿を連れてこさせ、殺させ、心臓と舌をとり、お皿の上に乗せました」

★KHM 107(2人の旅職人)：悪い職人が施しを与えた代償としてヒーローの目をくり抜く→目は首くり台から落ちた露で再生する。鳥が人間の目をつつき出す→鳥が悪人に対する罰

として。

靴屋は空腹の仕立屋にパンの代償として彼の目を要求する。「石のような心を持った靴屋は、鋭いナイフで右の目をくり抜きました。……心の中から神様を追い出してしまった靴屋は、ナイフをとって仕立屋の左の目をくり抜きました」

靴屋が首くくり台の下で「目を閉じて眠ろうとすると、2羽の鳥が、首をくくられた罪人の頭から大きなわめき声をあげて飛びおりてきて、靴屋の目をつつき出しました。気が狂って彼は森の中に駆け込み、そこでのたれ死にしたにちがいありません」

*人間を罰するための目をつつき出す鳥として、鳩と鳥がしばしば登場する。鳩は精霊、鳥は悪魔の使いと考えられることが多いが、ここではその区別はなく、首くくり台の場面から鳥がその役割を演じている。

目を再生させるのは、この他に KHM 121(何も怖がらない王子)の川の水、KHM 12(ちしゃ＝ラプンツェル)の愛する人の涙がある。なお、KHM 12の失明は「11 いばらに刺される」項に分類してある。

★KHM 111(腕利きの猟師)：ヒーローが成敗した悪い大男の死体から手柄の証拠品として舌を切り取る。

猟師は悪い大男たちの首を切り落として殺害し「3人の舌を切り取って、はいのうにいれました」

「『このサーベルで私は3人の大男の首をはねたのです』と、彼は言い、そのしるしに大男の舌をはいのうから出しました」

★KHM 118(3人の軍医)：ヒーローたちが自らの意志で自分たちの心臓、目をそれぞれ切り取る→元に戻せる技術の証として。兵隊が預かった臓器の紛失を隠すために猫の心臓と豚の目を切り取る→盗まれた2人の軍医の心臓と目の代替として。

第2の軍医は自分の心臓をえぐり出して、第3の軍医は自分の両目をくり抜いて、次の朝に元に戻せると言う。「言葉どうりに……心臓と目を身体から切り取って、お皿と一緒に乗せて、主人に渡しました」預かっていた心臓と目が女中の不注意から猫に盗まれると、「女中の恋人である兵隊はそれから猫を捕まえて目玉をくり抜きました。そして、地下室から豚の心臓を取ってきました」翌日それを軍医に渡しました。

*目と心臓が知らぬ間に猫の目と豚の心臓にすり替えられた軍医たちが猫と豚の行動をする滑稽話であると共にうぬぼれに対する戒め。

★KHM 121(何も怖がらない王子)：悪い大男が強奪目的にヒーローの目をくり抜く→魔力を持つ腕輪を奪う。小川の水で目は再生する。

大男は不思議な力を持つ腕輪を王子から奪うため、「王子が服を着るのに気をとられているところを襲って、王子の両方の目をくり抜きました」

きれいな小川の傍で腰をおろした王子に忠実なライオンが「前足で王子の顔に水をかけました。水の滴が2つ3つ王子の目玉の穴を濡らすと、王子はまたいくらか見えるようになりました」「王子は神様のお指図を知り、川に身体をかがめ、川の中で顔をバチャバチャ洗いました。そして起き上がると、彼の目は元よりも明るくきれいになりました」

★KHM 148(神さまのけだものと、悪魔のけだもの)：悪魔が動物の目をくり抜く。

神様が創った狼が、悪魔が創った山羊を殺したことに腹を立てた悪魔は「山羊の目をすっかりくり抜いて、自分の目をはめこみました。こういうわけで、山羊はみんな、悪魔の目とかみ切られたしっぽをもっており、悪魔は好んで山羊の姿をとるのです」

*山羊が悪魔のような赤い目をしており、よく悪魔の化身とされる理由としてとりあげられ

ている滑稽話。

[7 身体を切り刻む]

身体を切り刻むモチーフは4話4例に見受けられる。もちろん細切れにされた人間は死に至るのであるが、骨やばらばらにされた部分を揃えて再生するのが3例ある。

神話、昔話、伝説には、KHM 147(焼かれて若返った小男)でイエスが老人を火にくべて若返らせる等の再生のモチーフがしばしば登場する。骨は血や毛髪とともに生命の素材が宿る場所で、骨から魂が語りかけてくると信じられていた。例えば、KHM 28(歌う骨)では殺された人の骨で作られた笛が殺害者を歌で伝える。また、骨や身体の一部を完全に収集し、揃え並べることに人間や動物の魔術的な再生に対する宗教的な信仰が反映している。

★KHM 40(盗賊のおむこさん)：盗賊が娘を切り刻む→死。ヒロインもその危機に遭遇する。

盗賊の家にたどりついた粉屋の娘にその年寄りのお婆さんが『あそこに私は水を入れた大きなお釜をかけているけどね、やつらはおまえさんをつかまえてしまったら、情け容赦なく切り刻んで食べてしまうんだよ。やつらは人喰いなんだからね』

「極悪者たちが帰ってきました。やつらは別の若い娘を引っぱってきたのでした。……やつらは娘に葡萄酒を盃に3杯なみなみと注いで飲ませました。……それを飲むと、娘の心臓は破裂しました。すると盗賊たちは娘の着物をはぎとって、娘を机の上に寝かせ、きれいな身体を細切れにして、その上に塩をふりかけました」

★KHM 46(フィッチャーの鳥)：魔法使いが約束を守らない人間を細切れにする→多くの死体の状況。2人の姉は首を切られ手足を細切れにされる→死→ヒロインが身体の一部を揃えることで再生する。

魔法使いから開けることを禁じられた部屋に娘が入ると「大きな血だらけのたらいが真ん中にあり、その中に、細切れにされた死んだ人間たちがころがっていました。傍に木の台があって、びかびかの斧がそれに乗っていました」

娘がたらいの中に落とした卵についた血はいくら拭ってもとることができず、約束を守らなかったことが魔法使いに知れる。彼は「娘を投げ倒し、髪の毛をつかんで引きずっていき、台の上で首を切り取り、手足を細切れにしました。娘の血が床を流れました。それから魔法使いは娘の身体を、他の死体の入っているたらいの中に投げ込みました。……2番目の娘さんも同じ目に遭いました」

3番目の娘が2人の姉の死体を発見する。「2人の娘さんがたらいの中でむごたらしく殺され、細切れにされていました。しかし、娘は手を出して、ばらばらの手足を集め、頭、腹、腕、足をきちんと揃えました。欠けたところがなくなると、手足が動きだし、身体がくっきました。2人の姉は目を開き、生き返りました」

*「娘の血が床を流れました」の表現はメルヒェン形態からすると特別な意味がない不要な表現のようであるが、血は生命と同義であり、死を強調している表現と解釈し得る。

★KHM 47(ねずの木の話)：母親が息子の死体を細切れにする→ヒロインが身体の一部を揃えることで小鳥に変身→小鳥が復讐を終えると人間に再生する。

悪魔の指図で先妻の男の子を殺してしまった「母親は男の子を取り出し、細かく刻み、おなべに入れ、スープに煮ました」

「娘はテーブルの下から大小の骨を残らず拾い上げ、衣の布にくるんで、戸の外に持ち出して、血の涙を流しました。……ねずの木の下の緑の草の中に骨を置きました」

「霧のようなものがねずの木から出ました。そして霧の中で火のようなものが燃え、火の中

から美しい小鳥が1羽飛び出しました」

小鳥が粉引き臼で母親への復讐を終えると、「煙りと炎がそこから燃え上がりました。それが消えるとそこには可愛い兄ちゃんが立っていました」

*民間信仰では、ねずの木は悪霊よけの働きを持つとされている。一方、ねずの木の樹脂は香料として、また医薬品として古くから用いられていた。「血の涙を流す」の血は生命素材の総括概念であり、古代ゲルマンの礼拝で行われた血の洗礼や聖者の血を彷彿させる。また、涙は後悔の心がある印として天の憐れみに訴えるものであり、涙が出ないのは悪魔の影響に帰せられたとされていた。ここではねずの木と血の涙が再生への強い原動力となり、次の展開への重要な役割を担っている。

★KHM 81(のんき者)：神が人間の死体の手足をばらばらにする→部分を揃えて再生させる。

「聖ペテロは死んだ人の手足をばらばらに切り、それを水の中に投げ込み、鍋の下に火をおこして煮立てました。肉がすっかり骨から落ちると、彼はきれいな白い骨を取り出して、テーブルの上に置き、生まれたままの形に並べて組み立てました」

[8 人喰い、身体の一部を食べる]

人喰いの存在は童話の中に限らず、深い森に住む人肉を食べる妖怪や鬼、人種の存在は世界いたるところで信じられ、恐れられていた。このため人喰いのモチーフは自ずと伝説、口承童話や昔話にも登場してくる。

グリム童話でも6話に各1例見られる。実際に人肉を食べるのは3例(盗賊の習慣が1例、知らずに食べるのが1例、動物に姿を変えた人間を食べるのが1例)で、未遂が1例と代替の物を食べるのが2例である。知らずに人間を食べる1例を除くと魔女や盗賊、大男が食肉の意

志を持っている。

★KHM 15(ヘンゼルとグレーテル)：魔女がヒーローを煮て食べる→未遂。ヒロインを焼いて食べる→未遂。ヒロインの機転で魔女はかまどに入れられ焼死する。

「魔女はグレーテルのところへいくと、……『兄さんに何かうまいものを作っておやり。兄さんは、外の小屋に入っている。これから太らせなくちゃ。太ったら、わしが食べてやるんだ』」

「『ヘンゼル、指を出しな。そろそろ脂がのってきたかどうか、さわってみるから』」「『太っていようが、痩せていようが、明日は殺して、煮てしまうんだよ』」

「『中に入って、パンを入れてもいいように、火がよくまわっているかどうか見るんだよ』と魔女は言いました。グレーテルが中に入ったら、お婆さんは、かまどの蓋をして、この子を焼いて食べてしまうつもりでした」

★KHM 40(盗賊のおむこさん)：盗賊が娘を細切れにして塩をかけて食べる→娘→死。ヒロインもその危機に遭遇する。

盗賊の家にたどりついた粉屋の娘にその年寄りのお婆さんが「やつらはおまえさんをつかまえてしまったら、情け容赦なく切り刻んで食べてしまうんだよ。やつらは人喰いなんだからね」と伝える。

別の若い娘を連れて戻ってきた盗賊は「娘の着物をはぎとって、娘を机の上に寝かせ、きれいな身体を細切れにして、その上に塩をふりかけました」

★KHM 47(ねずの木の話)：母親が息子の死体をスープに煮る→父親が何も知らずに食べる。ヒロインがその骨を揃える→小鳥として再生する→人間に再生する。

母親は悪魔の指図で先妻の男の子を殺してしまう。『『もうどうしようもないんだよ。お兄ちゃんをスープにしよう』』「母親は男の子を取り出

し、細かく刻み、おなべに入れ、スープに煮ました」何も知らない父親は「スープをさかんに食べて、骨をテーブルの下に投げ、すっかりたいらげました」

★KHM 53(白雪姫)：母親がヒロインの肺と肝を塩をつけて食べる→狩人が殺害の証拠の代替として母親に猪の肺と肝を提供する。

狩人が白雪姫の代わりに持ち帰った猪の肺と肝を、「料理人が妃のいいつけで、それを塩につけて、料理しました。意地悪な妃はそれを食べてしまい、白雪姫の肺と肝を食べたと思っていました」

*動物の臓器は民間医療や魔法に用いられ、生命と魂が宿っていると信じられていた。美しいヒロインの臓器を食べる行為は、白雪姫の美しさを自分に備えようとする継母の嫉妬心の表れであると解釈し得る。

★KHM 93(からす)：大男が空腹のため人間を食べる→ヒーローは魔力を備えたパンを代りに与え、難を逃れる。

「大男は彼を見ると、『おまえはいいところに来た。おれは長い間何も喰っていない。さっさく夕飯のかわりに飲み込んでやろう』といいました。……『おまえさんを満腹させるだけのものは、たっぷり持っているよ』と、彼は言いました。『それが本当なら、心配しなくてもいい。他に何もいから。おまえをたいらげようと思っただけだ』

★KHM 141(子羊と小さい魚)：魔女が呪いで子羊に変えた継子を料理させ客の食事に出す→料理人が他の子羊を代替にして客に出す。

ヒーローを子羊に、ヒロインを魚に変えた魔女は「料理人を呼んで、『行って、草原の子羊を連れてきて、殺しなさい。お客様に出す物が他にないから』

[9 真っ赤に焼けた靴・鎖・炭を用いる]

刑罰には古来、火炙りを始めとした火にまつ

わる刑が多く行われたようである。焼き印、手を火に入れる、火の中を歩く、焼いた鉄をあてるなど、身体の部分的な箇所に苦痛を与える刑も多く伝えられている。グリム童話にもこれらの刑に由来すると思われるものが見られる。

★KHM 53(白雪姫)：王様が悪い継母に焼けた靴を履かす→ヒロイン殺害を計画した罰として→死。

白雪姫殺害に失敗した妃が白雪姫の結婚式に顔を出す。「鉄の上靴がもう石炭の火の上に乗せられていました。それが火ばさみで持ち込まれ、妃の前に置かれました。そこで、妃は真っ赤に焼けている靴に足を入れ、地面に倒れて死ぬまで、踊らなければなりませんでした」

*元来幸運をもたらす物とされている靴を真っ赤に焼いて悪事を罰する道具として用いている技法が効果的であり、印象的である。

★KHM 4(怖がることを習いに旅に出た男の話)：呪いかけられた人間が動物の姿で焼けた鎖につながる。

呪われた城にヒーローの少年が入ると「黒猫や黒犬が真っ赤に焼けた鎖につながれて出てきました。だんだんその数が増えて、少年はもう逃げ場がなくなってしまいました。……少年はナイフをつかんで、……切りかかりました。飛んで逃げたのもありましたが、他のは殺して池の中に投げ込みました」

*焼けた鎖につなぐことは、悪魔の手に落ち逃れられずにその支配下にある状態を、黒猫は女性、黒犬は男性を表している。

★KHM 76(なでしこ)：ヒーローが欺いた料理人に焼けた炭を食べさす→料理人は最後に四つ裂きの刑に処せられる。

自分を殺害しようと策略した悪い料理人に王子が「『おまえは黒いむく犬になって、金の鎖を首につけろ。そして、喉から炎を吹き出すように、真っ赤に焼ける炭を喰え』そう言うと老人はむく犬に変わり、首に金の鎖を巻いていま

した。料理人たちは燃えている炭を運んできました。それを老人が食べたので、喉から炎がふき出しました」

王様の前でも同じことが行われ、料理人の悪事が明らかになる。

＊鎖は服従の印しであり、それが金製であることはヒーローの公正を表す。また、犬は忠実で賢い一方で、何かしら高貴でない不純なものを内包している。つまり金の鎖につながれた黒い犬は、力と自由を失い、正しい者の僕となり仕えている状況を意味している。

[10 蛇の中に入れる]

古代・中世の死刑の刑罰である野獣晒しの一部と考えられる。KHM 13(森の中の3人の小人)に見られる釘の打ち付けた樽に押し込む刑や、KHM 11(兄と弟)に見られる獣に引き裂かせる刑、また、KHM 76(なでしこ)の四つ裂きの刑などと並んで、人を騙し陥れる行為に対しては、時間的な苦痛や恐怖が伴うこの種の重罪が好んで適用されている。

★KHM 9(12人の兄弟)：ヒロインを陥れた継母は毒蛇の樽に入れられる→裁判による刑→死。

ヒロインである若い妃の悪口を言い続けた「悪い継母は裁判にかけられ、煮えたぎる油と、毒蛇がいっぱい入っている樽の中に入れられ、ひどい死に方をしました」

★KHM 135(白い花嫁と黒い花嫁)：王様はヒロインの兄が花嫁をすりかえたと誤解して彼を蛇の穴に投げ込む→真の花嫁であるヒロインが事実を伝えて王様自ら兄を救済する。

御者の美しい妹と結婚することになっていた王様は、継母と娘たちの策謀で入れ替わった醜い花嫁を見ると「たいへん怒って、御者をまむしや蛇のうようよしている穴の中に投げ込め、と命じました」

[11 いばらに刺される、針で刺す]

ばら、特に赤いばらは、ギリシャ神話では死と再生のシンボルとなっているが、キリスト教ではキリストの血の象徴であると同時に聖母マリアの象徴でもある。伝説や聖者伝説にしばしば見られ、神託では、死と結び付けられている。KHM 50(いばら姫)では美の象徴として、また、KHM 203(ばら)では死の前兆として、KHM 51(めっけ鳥)ではばらへの変身として用いられている。

★KHM 12(ちしゃ＝ラプンツェル)：いばらで目を刺される→失明→愛する人の涙で視力を回復する。

塔に閉じこめられている娘に会うことができなくなり「王子は望みを失い、悲しさと苦しきのあまり我を忘れて塔から飛び降りました。命はとりとめましたが、いばらの中に落ちたので、目をめっちゃめっちゃに刺されました。それでめくらになって……」

彼女の「涙の滴が2つ王子の目を濡らすと、2つの目がまた明るくなって、昔のとおり見えるようになりました」

★KHM 50(いばら姫)：城への侵入者をいばらで刺す→死。

つむで指を刺して百年の眠りについた姫を救済するために、いく人も王子が来て「生け垣の間からお城の中に入ろうとしました。そうはいきませんでした。いばらは、まるで手を持ってでもいるように、しっかりとからみついたので、王子たちは、その中にひっかかったまま、もう出られなくなり、いたましい死に方をしました」

★KHM 56(恋人ローラント)：いばらで刺す→バイオリンの音で踊らせる→死。

魔女が娘を殺害のために連れ戻そうとすると娘の恋人の楽師はバイオリンを「弾き始めました。すると、魔女はいやおうなしに踊らずには

いられませんでした。……いばらが彼女の着物を身体から引き裂き、彼女を刺して、傷を付け、血だらけにしました。……彼女は倒れて死ぬまで踊り続けなければなりませんでした」

★KHM 108(ハンス針鼠ぼうや)：ヒーローの針鼠の皮で刺す→嘘をついた罰として。

救済のお礼に娘を与えるという約束を破った王様とその姫に「ハンス針鼠ぼうやはお姫様のきれいな服を剥ぎ取って、針鼠の皮で彼女が血だらけになるまで刺したうえ、……彼女を追い返しました。こうしてお姫さまは一生人から馬鹿にされるようになりました」

★KHM 110(いばらの中のユダヤ人)：いばらで刺す→バイオリンの音で踊らせる→お金を渡して逃れる。

下男がバイオリンを弾くと「いばらがユダヤ人のおんぼろの上着を引き裂き、山羊ひげを梳るようにこすり、彼の全身をつき刺したり、つねったりしました」「『おまえはさんざん人さまを苦しめた。今度はいばらの藪がおまえを同じ目に遭わすようにしてやる』と考え、また新たにバイオリンを弾き始めました」

[12 熱い蠟をたらす]

蠟燭は古来から生命力を表し、運命の観点と深くかかわっている。KHM 44(死神の名づけ親)のモチーフのように、蠟燭が尽きることは死を意味する。熱い蠟は此岸の世における強い生命力を意味していると考えられる。

★KHM 137(3人の黒いお姫さま)：熱い蠟をたらす→彼岸との離別→魔法が解ける。

息子が母親に魔法にかけられた城にいる黒い姫たちの話をすると、母親は息子に「それはど

うもよくないことのように、清められた蠟燭を持っていき、3人の顔に熱い蠟をたらしておやり、といました。……彼は呪にかかっている城に戻り、お姫さまたちが眠っている間に、顔に蠟をたらしました」彼女たちは姿を消す。

[13 石臼を落とす]

古代・中世の刑罰の死刑に見られる石臼の頭上落下に由来していると思われる。

★KHM 47(ねずの木の話)：小鳥が石臼を落とす→殺害に対する母親への復讐→死。

悪魔の指図で母親に殺された男の子は小鳥に姿を変え、「母親が外に出ると、……小鳥が粉引きの石臼を彼女の頭の上に投げ落とししたので、彼女はぐしゃりとつぶされてしまいました」

★KHM 90(若い大男)：ヒーロー殺害のために石臼を落とす→ヒーローにたいする恐怖から→実行するがヒーローが剛健のため効果を見ない。

『『あいつに井戸の中に入って掃除しろと言いなさい。あいつが下に降りたら、そこにある石臼を1つころがしてきて、あいつの頭の上に落としてやれば、あいつは2度と日の目を見ることがないでしょう』』と大男に給金を払いたくない管理人に書記たちが入れ知恵し、実行する。大男は「仕事を済ませると上がってきて、『まあ見てくれ。おれはきれいな首飾りをしてるぜ』と言いました。それは首の周りに吊している石臼のことでした」

[一統一]